

# 新潟県立歴史博物館

所在地 長岡市関原町1丁目字権現堂2247番2

設置者 都道府県(新潟県)

博物館類似施設／歴史博物館



## 「守れ!文化財～ 『障害』をめぐるモノとヒトに光を灯す～」

2019年度から継続事業

創造・人材育成

全国の「障害」に関わる歴史資料について「モノ」と「ヒト」に焦点をあて、人が「障害」とどのように向き合ってきたのかというテーマで歴史をひも解く展示。

## 障害者施設を利用する障害者のためのワークショップ 「福祉とアートが出会うとき」

2020年度から継続事業

交流

京都府立聾学校で開催している、国指定重要文化財「京都盲啞院文化財」を活用したワークショップ。同校生徒を対象に毎年異なるテーマを設定して実施している。

### 「守れ!文化財」プロジェクトについて

事業はいずれも2019年度に始まった障害に関する歴史資料の保管・活用を考える5年間のプロジェクト「守れ!文化財～モノとヒトに光を灯す～」事業の一環として行われた(新潟県立歴史博物館を中核館として、上越市立歴史博物館、京都府立聾学校、九州保健福祉大学、川村義肢株式会社が参加)。京都盲啞院資料の調査・整理とともに、京都府立聾学校の生徒を対象に年1回のワークショップを実施し、最終年度の2023年度には同名の展示を開催した。

取材日 2023年12月14日

回答者 山本哲也(新潟県立歴史博物館 経営企画課 課長代理 交流普及担当)



## 「守れ!文化財 ～モノとヒトに光を灯す～」事業

ワークショップについて

障害に関する文化財というテーマの事業に



取り組むことになったきっかけや目的を教えてください。

2018年に、日本初の盲聾学校である京都盲啞院(1878年発足)の関係資料3,000点が国指定重要文化財になったことがきっかけです。京都盲啞院は大正時代に盲学校と聾学校に分かれ、資料は現在、京都府立盲学校に2,633点、京都府立聾学校に367点が別個に所蔵されています。府立盲学校には盲教育史の第一人者がいて、資料はある程度問題なく整理・保管されていますが、聾学校の方では狭い歴史資料室に保管し、一部を展示している状況でした。当時の校長先生がその保管環境に不安を感じ、当時大阪府内で学芸員をしていた武井二葉さん(現明石市立文化博物館長)に相談を持ちかけ、そこから博物館のバリアフリーやインクルーシブについて研究している私に話が回ってきたのです。新潟県には日本で3番目に設立された盲学校である県立高田盲学校がありましたが、2006年の閉校後の資料の状況も気になっており、これらを文化財と教育というキーワードでつなげられるのではないかと考えました。

ちょうどパラリンピックの開催が迫っている時期でもあり、障害者の社会参加に対する社会の関心は高まっていました。私自身、1964年の東京パラリンピック開催に尽力した中村裕博士の活動に関心があり、当時の資料を調査したいと考えていました。また、当時の武井さんの地元である大阪府大東市に義手や義足を製造する川村義肢株式会社があり、歴史的資料が同社に保管されていました。そのように世の中に障害に関する歴史資料は多数あるものの、基本的に博物館等ではなく、企業や学校などに保管されていると

改めて気がついたのです。それらの資料が今後どうなっていくのかが気になり、こういったモノを守り、受け継いでいくことをテーマにした事業を構想しました。事業は「平成31年度文化庁文化振興補助金 地域と共働した博物館創造活動支援事業」に採択され、5年プロジェクトとして始動しました。

実はその年（2018年）、当館では、東日本大震災で被災した岩手県の陸前高田市立博物館の資料を「守れ！文化財」という題名で展示していました。博物館や、その所蔵品をどのように守るのかを考えてもらおうというものです。障害にまつわるものや資料についても、それらをどう守り、受け継ぐかということ世の人たちに問いたいという点でテーマが共通すると考え、事業名も「守れ！文化財」という展示名をそのまま受け継ぐことにしました。

### 事業はどのように進められましたか。

事業の実行委員会には参加団体の内外から約30名が参加し、事業の最終年度には総まとめとして展覧会を開催することを前提として、資料調査、ワークショップなどを分担して進めました。

初年度（2018年度）は、京都府聾学校に保管されている資料について、状態などを確認しながら再整理するところから始めました。学校の資料室をすぐに文化財の保管に適した施設に改修することはできないため、資料室に入るときにはスリッパに履き替える、掃除をする、中性紙保存箱に資料を入れ、防虫剤等とともに棚に収める、空調の入れ方を検討する、リスト順に文化財を整理し、各々の状態を確認するなど、できることから始めました。

2～3年目は聾学校、盲学校以外の資料の調査研究に着手し、太陽ミュージアム<sup>1</sup> や川村義肢株式会社の視察、ユニバーサル展示関連の視察を行い

<sup>1</sup> 別府市にある社会福祉法人太陽の家が運営する、共生社会に向けての情報発信の拠点、地域交流の場をめざすミュージアム。太陽の家の創設者であり、日本の障害者スポーツの父と呼ばれた中村裕の理念を伝える資料展示のほか、競技用車いすやポッチャの体験などでもできる。

ました。また、教具のレプリカ作成や、「手から味わうお茶会」という五感で味わうワークショップを開催しました。4年目は史資料集の冊子をまとめ、5年目に展覧会を実施、という流れです。

これらの活動と並行して、文化財の保存と活用という視点で、博物館教育の専門家を中心に同校の生徒を対象にしたワークショップも企画しました。

### ワークショップの企画・実施のプロセスをお聞かせください。

当初は資料の保管状態と学校側のニーズ（文化財指定以外の資料のリストがない、どこに何が保管してあるのかわからない、適切な保管方法を知りたい、教師らに資料を活用してもらいたい等）に鑑み、資料の取り扱いに関するテーマや「学び」に関わるテーマを検討しました。しかし、学芸員以外の人間が文化財資料を取り扱う難しさもあり、今後、資料を活用してもらう手がかりにもらうことを前提に、まずは学校にどのような資料があるのかを知ってもらい、自分の学校の歴史に触れることから始めることにしました。そこで教具などの資料や、京都盲啞院の教師や生徒が描いた作品をじっくり見てもらい、親しみをもってもらうことを目指した「学びの歴史をほりおこそう」を開催しました。

対象が聴覚障害のある生徒であることについて、特に苦勞したことはありません。ただ、説明は先生や保護者による手話通訳を介して行うため、説明の間は手話を注視し、作品を鑑賞する時間が短くなるという傾向はあります。また、生徒による発表も手話や口話で行われますが、発話にコンプレックスがあり、発表にプレッシャーを感じたり、恥ずかしがったりする生徒もいました。

これまで開催したワークショップは表の通りです。年1回、少しずつテーマを変えながら開催してきました。もちろん全ての生徒が歴史資料に興味があ

るわけではありませんが、資料に関する関心や理解は年々深まり、3年目、4年目になると「あのとき見たね!」と歓声が上がったり、思いがけない視点からの見方を披露してくれたりと、学校の資料や歴史に興味を持ってもらう

## 表1) ワークショップ一覧

### 2019年度 学校の歴史をほりおこそう

【ねらい】 学校にどのような資料があるのかを知り、学校の歴史に触れる。資料に親しみをもってもらおう。

【内容】 明治期の授業の様子を写した写真と、写真に写っている掛け軸等によるミニ展示を鑑賞。資料と向き合うときに大切なことを最初に話した上で、自由鑑賞→写真資料と絵画資料のつながりを探しながらの鑑賞→先生のお話を経て、再度自由鑑賞、というプロセスで鑑賞をした。合間に気持ちメモも書いてもらった。



### 2020年度 箱の館：ちいさな学芸員のミュージアム

【ねらい】 資料にどのような背景があるのか、資料を用いてどのような発信ができるのかについて、生徒自らに考えてもらう。歴史の受け手から創造的な送り手となることを目指す。

【内容】 底面がA4サイズの箱を会場に見立て、所蔵資料を用いたミニチュアの展示を構成。使用する資料は日本画、掛図、図案資料、写真資料など25点を選び、縮小してシール形式で提供。生徒はテーマ設定、作品選出、会場構成に取り組んだ。

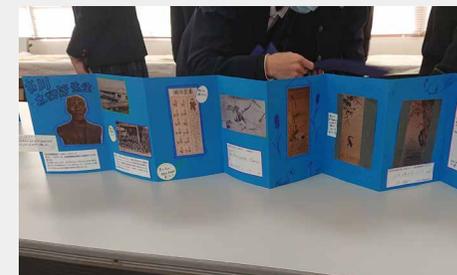


という当初のねらいは、ある程度達成できたように思います。先生方が、通常の美術の授業とは異なる視点からの作品の見方もあると気づいてくださった点もよかったと感じています。

### 2021年度 学校史屏風：学びの歴史を物語ろう

【ねらい】 資料を用いて、生徒らが学校の歴史を他者に伝えるためのツールをつくる。

【内容】 屏風状に折り畳まれたカードに資料の画像を貼り、学校のストーリーが伝わるように構成。学校史や絵画の読み解きに重点を置いた。



### 2022年度 資料をじっくり味わうとは —生徒らと文化財を探究するための試み— 問のある展示会：歴史資料室の展示を企画しよう

【ねらい】 対話型鑑賞により、深い鑑賞と意見の発表を行う。

【内容】 内容:岡藤園「鹿図屏風」をじっくり鑑賞し、そこから読み取れるものを発表。事前に教員を対象に同じワークショップを実施し、理解してもらった上で生徒に実施した。その後、資料のレプリカを用いたミニ展示を構成してもらった。

\*人数は、中等部と高等部の合同開催では30名弱、個別開催では10名強が参加。

## ワークショップ実施にあたり、 どのようなことに配慮しましたか？

事前に学校の先生方と綿密な打ち合わせを行い、当日の進め方の擦り合わせなどのほか、どの生徒にはどのような配慮が必要であるかを確認しました。当日は先生方についていただき、特に知的障害と重複障害のある生徒については、きめ細かくフォローしていただきました。先生方との連携は非常に重要です。

### 「守れ！文化財 ～モノとヒトに光を灯す～」事業

#### 展示について

2023年度に開催した展示では、  
「バリアフル」な展示に挑戦されています。

図をお聞かせください。

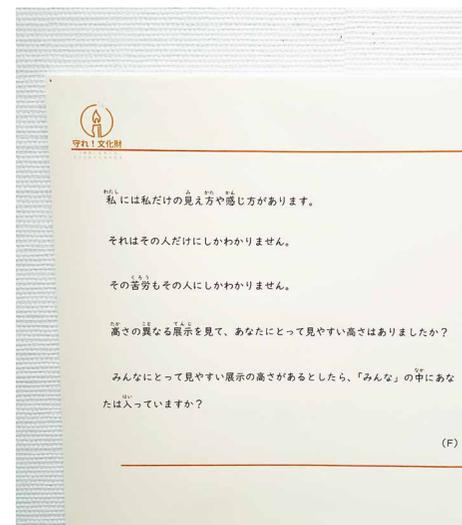
障害や障害者そのものを知ってもらおうというより、障害というキーワードに基づく、社会に存在する多様なモノをどう受け継ぐのか、さらには障害に関するものだけではなく、世の中にあるさまざまなモノをどう考え、どうしていくべきなのかを多くの方々に問うことを目的としました。博物館はモノの展示が一般的ですが、ここでは「モノをどう受け継ぐのか」に加え、「障害というものをどのように自分ごととして考えてもらうのか」を伝えることを意識しました。

そのために試みたのが、展示会の導入部分を「バリアフル」にすることです。ヒントにしたのは天井高が150cmほどしかなく、テーブルも低い位置にあって、車椅子の人には快適ですが、いわゆる健常者には不便な「バリアフル

写真下)さまざまな人の目線に合わせた展示／写真右)縄文土器の展示台も車椅子の高さに合わせてあり、立っている人が見るには腰を屈める必要がある

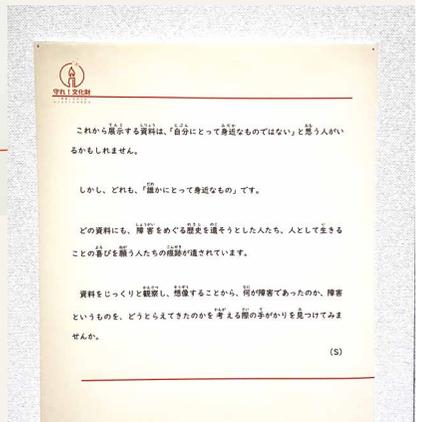


#### ▼ 展示会の導入部に掲げられた問いかけの文



私には私だけの見え方や感じ方があります。それはその人だけにしかわかりません。その苦勞もその人にしかわかりません。高さの異なる展示を見て、あなたにとって見やすい高さがありましたか？みんなにとって見やすい展示の高さがあるとしたら、「みんな」の中にあなたは入っていますか？

これから展示する資料は、「自分にとって身近なものではない」と思う人がいるかもしれません。しかし、どれも、「誰かにとって身近なもの」です。どの資料にも、障害をめぐる歴史を遺そうとした人たち、人として生きることの喜びを願う人たちの痕跡が遺されています。資料をじっくりと観察し、想像することから、何が障害であったのか、障害というものを、どうとらえてきたのかを考える際の手がかりを見つけてみませんか。



ストラン」です。それと同じ発想で、作品を展示する高さを車椅子の人の目線でちょうどよい高さにしたり、子どもや身長2mの人、さらにはキリンの目の高さに合わせたりしました。全員にとって絶対的によいものはないこと、障害のある方々は日常的に不利な立場にあることを感じていただいた上で、そこから先のモノの鑑賞に移る、という流れをつくりたかったのです。来場者アンケートでは「障害のある人の目線、車椅子の人の目線に気づかされた」という感想を多くいただいています。

### 障害関連の展示を視察されていますが、参考にしたものがあれば教えてください。

参考にしたというのとはやや異なりますが、三重県立美術館のアクセシビリティ向上のための多様な取組は、障害というものを自分ごととして捉えてもらう仕掛けづくりを考えるきっかけになりました。また、我々は展示でUDフォントという書体を用いましたが、三重県立美術館では障害者団体の方々に実際に試してもらい、UDフォントのほか、丸ゴシック体も読みやすいことを見出しています。これは新たな気づきになりました。

太陽ミュージアムの視察は、人の生涯にまつわるモノの展示をどう組み立てるのかを考え始める契機となりました。それは義足のコーナーで、モノだけではなく、個人の生き方も伝える展示として構成することにつながりました。

### 障害の当事者や障害者団体に意見を聞くなどはしましたか。

実行委員会のメンバーには聾学校関係者や聴覚障害のある人が1人、発達障害のある人も1人いて、適宜、意見を聞いていました。

### 今後、どのような展開を考えていますか。

事業は2023年度で終了しますが、京都府立聾学校の先生方が資料を活用していけるよう、文化財の扱い方や保管方法などについてレクチャーをする方向で考えています。また、学校が取り組める活動のヒントも置いていければとも思っています。もちろん学校との関係は保ち、いつでも相談に乗れる態勢にはしておくつもりです。

また、会期の後半になり、やはり学芸員をはじめ博物館の人に展示を見てほしいと思うようになりました。今回は障害をめぐるモノを起点にしましたが、守るべきものは他にもたくさんあるはずで。展示の最後に空の展示ケースを置き、そのケース内のキャプションを白紙にしたのも、自分ならここに何を入れるのか、つまり「あなたにとって守りたいものは何ですか」ということを問かけ、そこから「守れ!文化財」というキーワードに落とし込むことを意図したものです。バリアフル展示もそうですが、博物館にはまだ可能性がたくさんあり、博物館の人はもっとそのような仕掛けをしていかななくてはいけないという思いの発信でもありました。その意味でこの事業は、このような取組を広げていくためのスタート地点であると考えています。

学会からはこのテーマで研究会を実施したいとの誘いも来ています。いろいろなかたちで文化財を守ることへの問いかけを広げ、さまざまなものに光を灯して、守り、受け継いでいきたいと考えています。



展覧会の最後に置かれた空の展示ケース



展示ケース内のキャプション  
あなたは何に光を灯しますか？ ( ) 未来

### 他館に対してアドバイスや 活動のヒントをお願いします。

私はよく「学芸員は展示が下手だ」と言っています。博物館学芸員は、モノ自体は好きなのだけれどもモノを展示するということはどうなのかな、ということですね。ただモノを陳列して説明するだけでは、それによって社会的な問題への理解が進むことはおそらくありません。知識として伝えるだけでなく、それを自分ごととして捉えられるように伝えることは、もっと意識されてもよいでしょう。自分がやってみて難しさも経験しましたし、本展がそれに成功しているとも限りませんが、博物館の人間としてそのような視点を持つことは大切ではないかと思います。

